

渋ギャラジオ #27 「あれから、これから」

その2 「創作活動のその先」 第1話：福祉でアートを仕事にした理由 約22分

出演 ゲスト・原田啓之（医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA 施設長）、茂田正和（株式会社OSAJI 代表取締役、一般社団法人日本ケアメイク協会 副理事長）、ナビゲーター・門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

門 みなさんこんにちは。この番組は、東京都渋谷公園通りギャラリーがお送りする渋谷ラジオです。ギャラリーというと、作品を見に行くところという印象があるかと思いますが、この音声配信のプログラムでは、ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人の生の声をお伝えしています。シリーズ3年目となる令和7年度の番組は、「あれから、これから」のタイトルで、これまでにギャラリーの展覧会やイベントでご一緒した方をゲストに迎え、あれこれお聞きしながら、ゲストの活動の軌跡をたどります。ナビゲーターを務めるのは、私、東京都渋谷公園通りギャラリー門【モン】あすかです。収録はスタジオではなく、ゲストと現地に赴いて行います。

(ジングル：ottotto 「CLAP」)

前回の「あれから、これから」（その1）では、全盲の美術鑑賞者・白鳥建二さんと、アートマネージャーの岩中可南子さんと共に、佐賀県基山町にある、アートを仕事とする福祉施設「医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA [ピクファ]」を見学しました。続く（その2）では、ピクファ施設長の原田啓之さんと、東京都中央区・日本橋にある、スキンケアブランド「OSAJI [オサジ]」（以降、「オサジ」と表記）のラボにお邪魔して、株式会社OSAJI 代表取締役であり、一般社団法人 日本ケアメイク協会 副理事の茂田正和さんにお話しを伺います。

今回は、福祉施設のアトリエで行われている創作活動のその先について、うまれた作品が、どのようにして世に出ていくのか、作品を通して、作家がどのように社会と繋がっていくのか、その拡がりをお伝えしていきたいと思います。

ぜひ続けてお楽しみください。

門 さて、前回の収録では、アトリエで、制作中の作品を見せていただいたり、作家の皆さんと楽しくお話ししたりしました。このラジオを聴いてくださった方からも、原田さんのアシスタントでツアーする感じが好評で、臨場感がいいねーとか、ピクファに行ってみたくなった！と言っていただきました。

原田 原田さん、お久しぶりです。

原田 ご無沙汰です。よろしくお願ひします。

門 原田さんは、どうでしたか、前回の（収録）。

原田 今、病院の中で施設をやっているんですね。正式名称で言えば、ピクファって、「医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 ピクファ」という名称になるんですけど、病院の中いろいろやっている中で、内科もあれば透析の患者さんもいる。その方々もチラッとアトリエ見に来たり、近所のおじいちゃんおばあちゃん、キッズの子たちも施設に遊びに来る。絵を見て楽しんもらったり、障害のある人たちと触れ合ってコミュニケーション取ることも、僕たちの一つの仕事っていう形もあるし、障害のあるなし関係なくコミュ

ニケーションのあり方を伝えていく。

白鳥さんに来ていただいて。僕は、白鳥さんの名前を、結構聞いていたんですよね。いわゆる、見えない人たちが美術鑑賞をどういうふうにするかというので、結構文章を書いてあつたりだとか、お話には聞いていたので、やっと会えたみたいな。ただやっぱり、ないがしろにしていたわけじゃないんだけど、視覚障害のある方々にどうやって絵を楽しんでもらうかっていうのを結構考えさせられた。実際に白鳥さんと話してたら、白鳥さんは結構面白い人なので、もうフランクにあの時話していただいて、実際どんだけ説明されても僕見えないんですよって言われたのが結構面白かった。じゃあ、どうやって鑑賞するんですかって言ったら、いろんな人とグループで回って、その人に説明をしてもらうと。赤色があって、俺、赤わかんないんだけどって思いながら聞いているみたいな。そのコミュニケーションが面白いっていう。それが美術鑑賞につながっているっていう。あれは結構新鮮でしたね。

触ってもらって形をわかつてもらわないととか、それこそ赤色がとか、ただ赤色ってわかつているのかな、それを聞いたら傷つくのかなとか。その障害のある方それぞれの個性はあるだろうけども、あんまり構えすぎなくていいんだなっていう。いわゆるハードの部分も大事なんだけど、福祉って知的障害の人たちもそうなんだけど、ソフトの部分でどう広がっていくかみたいなのを、白鳥さんと話してて、壊してもらえたなっていう、いい意味で。

門 原田さんでもそうなんですね。

原田 やっぱり知的障害、自閉症、精神障害、いろんなそういうちょっと発達系の人だと、とやりとりすることがやっぱり 20 何年多いので、視覚障害のある人と何か美術を語るっていう機会が、実はありそうでなかったんで、結構新鮮でした。もう本当にフランクに話してくれたんで、マイクが入っているときかどうかわかんないけど、結構いろんなことビシバシ聞いて、それに対して笑いながら答えてくれるっていうのは、楽しかった、いい経験でしたね。

門 良かったです。改めまして、原田さんの自己紹介もお願いします。

原田 先ほどお話をしたんですけども、医療法人清明会っていう病院の中に、障害福祉サービス事業所といわれる障害者施設、ピクファっていうのがあります。B 型っていう施設で、通常クッキーを作ったり、箱折り作業したり、清掃活動したり、そういうのを仕事にして、工賃、要はお給料なんですけども、出来高性の工賃を稼ぐっていう施設の施設長をやってます。ピクファの場合は、絵を描くこと、それから物を壊すでも破くでも、何か表現することっていうのを仕事にしています。そんな施設です。

門 原田さん、ご自身のことも教えてください。

原田 僕自身は、兄が知的障害があって、幼少期から、母親の苦悩を見てた。重度で、目を離せば、すぐどこか走って行っちゃう。スーパーに行けば、お菓子の箱とか全部開けて食べちゃう。そういう家庭環境で育ってきたので、いじめじゃないけども、今から 40 年とか 45 年前って、障害に対する理解とか、そういうものもあまりないというか、伝えてくれる人たちはあまりいなかった。どっちかというと隠す文化というか。どういう行動をするとか、知ってもらえてなかっただけで、いじめじゃないけど、兄と遊んでたらルール守れないんで、サッカーやればボール持って走って逃げていくし、缶切りすれば缶持って、どつか走り去って行くし、遊べないんで、あんなバカな兄貴連れてくるなって言われて、それで

も連れて行ってたら、金属バットで殴られて、3針打ったりとか、それを母親には言えず、転んだっていう。そうなった時に、ソフトテニスやってて、日本一になって、それで食べていこうと思った時に、やっぱり母の苦悩みたいのが頭よぎって。だったら福祉を何か面白くというか、社会にどうつなげていくかということを、やったほうがいいのかなと。アートを仕事にしたっていうのは、療育をやってたんです、バイトで。自閉症の強度行動障害って言われるような、目を離したら本当に一瞬でいなくなるとか、5秒と座ってられない、学校に行っても算数とかそういうのができない、って言われる人たちと一緒に何かものづくりをしたりとか、今で言う放課後デイサービスみたいなことをやってるところがあったので、その支援員としてバイトで行ってた時に、絵を描いたりとか、何かを破ったりとかっていうのが、好きな人が多かったんです。5秒と座ってられない子が、自分の好きなことだと、もう2~3時間座ってずっとやってる。じゃあ、これを仕事にすればいいじゃないか、っていうので、体のいい「アート」って置き換えれば、意外と何度も正義になるので、それを仕事にしようっていうのを2002年に。その時、アートを仕事にするって謳ってできた施設って、実は、当時の僕の施設が初めて、日本で初めて。最初は国とか県からそんなことできるわけないって、認可がもらえなかつたりとかっていうのが、2001年、2002年くらいの時代ですね。それを強行突破じゃないけど、説明して、そういう文化的な活動ができる施設があってもいいんじゃないかな、っていうので、アートを仕事にして、今23年になるっていう流れです。

門 ありがとうございます。私と原田さんが出会いきっかけになったのも、当時私が多分2009年とか2010年とかだったと思うんですけど、吉祥寺で髪の毛を切りに行って、近くにあるカフェのちょっとした一角にギャラリースペースがありまして、お洋服屋さんが運営しているスペースで、でも今はいんすけど、そこで以前の施設の作品が展示されていて、これすごいオシャレ、なんだろうと思って見ていたら、すごいちっちゃい文字で、障害者の施設の作品です、みたいなことが書いてあって、普通逆だなと思ったんです。障害がある方が作ってるんですっていう看板が大きく掲げられていて、作品があるっていう入り口というか入り方だと思うんですけど、パッとカフェの中ですごくかわいい作品がたくさん並んでいて、確かにグッズも作ってたんですよね。手ぬぐいとかTシャツとかが、すごいかわいくて、オシャレなスペースだなと思って覗いたら、本当に小さく書いてあったっていう。結構衝撃で、そこからどういう施設なんだろうっていうのを調べて、お訪ねしたのがきっかけだったと思います。

原田 そうですね、カフェがあって、そこで展示とかやったり。あとどうしても僕ライブペイントとか、人と関係するような仕事っていうのをやりたくて。

門 そのカフェに行った頃、ちょうど小池アミイゴさんと私出会いまして、それで確かに原田さんに会いには、小池アミイゴさんと一緒に行ったんです。

原田さん、その後も度々東京で展示を行っておられて、いくつか私もお邪魔したかなと思うんですけど、確かに世田谷の代田橋にあるカフェでも展示されたりとかしてたかと思うんですが。

原田 そのチャバーっていうカフェも、実は小池アミイゴさんに教えていただいて、つないでいただいて。

福岡、僕、一番最初に絵画を展示したのって、一番最初ギャラリーなんんですけど、2002年に始まって、2002年の冬には福岡のギャラリーで展示をした時に、ちょっと思ったのが、

絵が好きな人しか来ないなっていう。僕どっちかっていうと、アートはやってるけど、アートは媒介であって、福祉をやってるイメージなんですよ。ってなると、彼らが広がりを持っていく、彼らの人生がどう広がっていくか。作品でアーティストです、絵が売れましたっていうだけだと、何も広がらないと僕は思っているので、こういう障害があってとか、僕の幼少期、5秒と座ってられないのに、そういう多動っていう障害があるけんやねとか、それを知つてもらえると、彼らが走り回ってても、大丈夫、大丈夫、あの人たちちょっと多動だから、また戻ってくるから、みたいなを知つてもらえたなら、障害が障害でなくなる時が来るっていうのと、一緒に母親が買い物に来てた時とかに、お母さんたちが、周りが理解してくれたら、ほら、こっち座ってとか、じっとしておきなさいとかっていう、気遣つてカフェに行かなくていいなっていうのもあって、カフェでイベントをしまくってたんですよ、当時、福岡で5年ぐらいかな。当時、カフェソネスっていう福岡に、今もありますけど、カフェがって、そこは壁真っ白んですよ。何も置かないっていう、飾らないっていうがモットーのカフェが、彼らの絵と出会つて、展示をしたいってなつて。モットーがあるのにいいのかって言つたら、アートっていうより、やっぱり彼らのことを広めていきたい。彼らがお客様になつてくれたら、障害のある人たちがコーヒー飲みに来ちゃいけないのかって、そんなことはない。それをまた、いろんな人と関係していくことによって、広がっていくんだつたら、うちは力貸したいって言って、いろんなカフェで、数珠つなぎに紹介してもらいながら、それがチャビー、東京まで飛んだっていうですね。

門 当時、施設にお邪魔するときも、私もすごい緊張をして、福祉って大変そうだし、不躾に踏み込んでいいものではないよね、態度とか言動とかも気をつけないとなと思って、すごく構えてお邪魔したんですけども、原田さん自身がすごいフランクで、しかも施設の作業をされている方、アーティストの方たちも、外に出てライブペインティングしたりとか、カフェで展示したりとかされているっていうのが結構驚きで、カルチャーショックと言つたら言い過ぎかもしれないんですけど、自分の認識が間違えてたなって、先入観って恐ろしいなって思ったんですね。

原田 最初、ライブペイントの話を企画会社さんにもらつて、2003年ぐらいに、しかも商業施設でやらないかって言われて、絵を人前で描くのが仕事になり得るのかって。今、ピクファにもいる本田さんっていうメンバー、街の人たちと一緒にライブペイントするっていうのをさせてもらったときに、いや、仕事になり得るよって言ってくださつた人がいて、その時に思ったのが、街中に本田さんと一緒に行って、美味しいお昼ご飯もクライアントが出てくれ、お買い物もでき、好きな絵を10mぐらいの絵を好きなように描かせてもらい、お金がもらえるって。

門 いいことしかないですね。

原田 そんなことできる。彼らが実際にリアルに外に出て、人に見てもらって、っていうところでコミュニケーションの練習もできる。コミュニケーションの練習っていうのはこっち側だけの問題じゃなくて、受け手のほう。なかなか話すのが苦手な人とどうコミュニケーションを取つてもらうかっていうのを、リアルで練習してもらう。施設見学とかじゃなくて、僕たちがポンと入つてやるってなつたときに、これは面白い。どんどん。移動式アトリエって呼んでたんですけど、いろんなところに今日、例えば象の絵を描いてて、写真だけじゃ面白くないなと思ったら施設の施設長に言って、今から動物園行つきますって言

って、予定表も何も作らずに動物園行って、動物を描いてくるとかっていうのをリアルにどんどんやってたので、メンバーもコミュニケーション能力とか、自閉症ってみんな殻にこもってるイメージがあるけど、おしゃべり好きな人は好きだし、みんなそれを知つてもらうのには、遊びに来てもらいやすい環境を施設の中に作るっていうのを作つてたという感じですね。

門 ありがとうございます。原田さんがそうやって、どんどんお仕事を周りに、施設の外に広げていったっていうお話ももう少しお聞かせください。

原田 まず第一に、彼らのことを知つてもらつていうことと、彼らが人生を広げるためにどういうふうな形で広げていくかってなると、やっぱりお仕事をするっていう。クッキーを販売したりとか、清掃活動するのは、全然いいです。ただ、よくよく大学時代3年4年時にいろんな施設を見に行つたりとか、調べたときに、お金、工賃を稼ぎたいと思っている福祉施設は、ただ企業と全く仕事をしていなかつたんですよ。

門 当時ね。

原田 一番お金を回している、経済を回しているのは企業がやっぱり回しているので、なんでそこと一緒に仕事をしないのかっていうのがすごくあって。だから企業と仕事をする。いわゆる彼らの絵をいろんな媒体、企業が持つている媒体に入れ込んでもらって使ってもらつて、対価をいただくっていう作業をしなくちゃいけないなっていうので、2002年から動き始めたという感じなんですね。企業と仕事をするときに、当時どうやって仕事を得られるかというと、施設側がお金もないし、ホームページとかちゃんとしたものも作れないしってなると、飛び込みに行くしかなかったです。ネットで「福岡」「儲かっている企業」って打ち込んで、上から順に行くっていう。行くっていうのはアポイントとっても会つてくれないので、行って、受付があつて、そこをスルーして。大企業ってビルなので、エレベーターの横にずっと部署が書いてあるんですよね。会長室、社長室っていうのがビルのトップにあって、今日会長かな、社長かな、社長に行こうって言って、7階に上がって。エレベーター降りたら、ちゃんと金のプレートで扉にプレジデントって書いてくれるので、そこをトントンつけて、ガチャって開けて、「誰?」って言われる。「5分間だけ時間ください」みたいな感じで、「怖いよ」って。「下の受付通ってきたの?」って言うから、「通ってきたけど言つてはいけない」と。そういうのいらないんで、5分だけ時間ください」って言って、「なんか怖いけど入んなさい」って言われて、「うちの絵を御社で何かしら使つてくれないか。」「じゃあいいよ。これに使つてみよう。」「じゃあ、いくらくらいで」「え? なんで障害者の絵を使ってあげるのに、うちはお金を払わないといけないの?」っていうのが2002年。「実は仕事が欲しくて」と、「それぐらいの熱量があるんだったら、寄付を君のところにあげる」と。いろんな企業で地場の福祉施設とかいろんなところに寄付渡したりとかもしてるので、「君の施設に今年はあげるようにするから、好きな額をかきなさい」って紙に渡してくれた社長さんもいて、僕そのとき2億って書いて渡したら、めっちゃ固まって、上から下までこう見られて、「君はまだ2億円プレイヤーではないな」って。「書けって言ったじゃないですか」「そういうことじゃない」って、また推し問答始まって。そんな感じで、お仕事をくださいっていうのをやってたっていう。そこから企業と繋がりが出てきたんですね。

門 ありがとうございます。今、声を押し殺して一緒に話を聞いてくださつていたんですけども、ここからは改めてご紹介をさせていただきます。今日は実は先ほどご紹介をしまし

たスキンケアブランド、オサジのラボにお邪魔しています。株式会社O S A J I 代表取締役であり、一般社団法人日本ケアメイク協会副理事長の茂田正和さんにもお話を伺いたいと思います。

茂田 よろしくお願ひします。

(ジングル：ottotto 「CLAP」)

以上で、「あれから、これから」（その2）の第1話を終わります。続く第2話では、スキンケアブランド、オサジの創設者で、ブランドディレクターでもある茂田正和さんにお話を伺っていただきたいと思います。引き続きお楽しみください。

第2話に続く